

次の文章は、ドイツに生まれ、アメリカで活躍した思想家ハンナ・アーレント（一九〇六～七五）が考へた「政治」のあり方について述べたものである。これを読んで、あとの問い合わせに答へよ。

複数性が政治の——同時に人間の——条件だというのはいつたいどういうことなのか。それは、一般的によく言われる言い方——「いろんな人がいる」ということ、あるいは「大勢の人間がいるのだから調整の必要もあるだろう」という、政治についての単純で日常的な言いぐさ——と、いつたい何が違うのか。

まずアーレントは、それ——複数性——が事実であるという点に立つ。「地球上に生き世界に住むのが人間（Man）ではなく、人々（Men）であるという事実」が、まず現実に生きているわれわれの存在の動かしがたい事実である。

さて、この複数性を集約^{II}解消する单一的「人間」の規範性がわれわれの本来のあり方を疎外するものとして退けられたとすれば、次にわれわれは、アーレントとともにこの「人々（Men）」の複数性それ自体を問わなければならぬ。つまり、「Men」という複数形は常に人間の複数的なあり方を実現しうるのか、というふうに。人がたくさんいるという事実、その事実の中に常にその本来性としての複数性が実現されていると言えるのか、というふうに。

たしかに人は、常にたくさんいる。いることはいるのだ。

だが、それにもかかわらず、この多数性のうちにわれわれの複数性が常に現実化されることは言えない。¹單純に言つて、いくら人がたくさんいても、アーレントから見れば、それは複数的な人々のあり方ではない。人間の複数性は事実であるにもかかわらず、また、だからこそ人間の最も基本的な条件であるにもかかわらず、常に実現しているとは限らないのである。多数は必ずしも複数ではないのだ。

例えば群衆を見てわれわれは「たくさんの人々が歩いている」と思う。確かに群衆は多数である。だが、群衆の「多数」性は何だろう？ いつたい、群衆を見て数えようと思う人がいるだろうか？

そもそも同じものをわれわれは区別しない。同じものはわれわれにとって「一」としてしか存在しない。机の上の消しゴムの消しかす（多数）は、通常われわれにとってひとまとまりの消しかす（単数）であつて、それが「いくつ」あるか数えることはできない。だが、いくつあるか数えることができないとすれば、実はそこには数えられるものはないのだ。そこには、数えられる異他のなものはないのである。

多数であることが複数であることを保証するわけではないのだ。……〔I〕

それでは、複数性はいかにして確保されるのか。つまり「数えられる異他のもの」はいかにして確保されるのか。

アーレントは言う。

「人間の複数性は、行い（action）をしたり話したり（speech）することの基本的条件である。それは等しさと差異という二重の性格をもつてゐる。もし人間たちが互いに等しくなかつたとしたら、お互い同士を理解できず、自分たちよりも以前にこの世界に生まれた人たちを理解できない。そのうえ未来のために計画したり、自分たちよりも後にやつてくるはずの人たちの欲求を予見したりすることもできないだろう。しかし他方、もし人間たちに差異がなかつたとしたら……そもそも自分たちを理解させようと/orして話したり行いをしたりする必要がない。なぜならその場合には、万人に同一の直接的な欲求と欲望を伝達するサインと音がありさえすれば、それで十分だからである。」

ここで、複数性は、等しさと差異を条件として語られる。……〔II〕

まず、われわれは人間同士として「等しい」。あるいは、ある「等しさ」を持つてゐる。あるいは、「等しい」という前提を互いに持つてゐる。

もしわれわれが余りにも異なるものだったとしたら、われわれはそもそも互いに話し合おうとしたり、何かの

行いをしようとしたりなどはしないだろう。われわれが、誰かに対して、何かを話したり、何かの行いをするとすれば、それは、その相手が「わかる」伝わる相手であるからに他ならない。同時に、そうわれわれが互いに行為するトすれば、それはわれわれが互いに「等しい」者であるから、あるいは「等しい」者であると信じているからである。

だが、もしわれわれがまったく「同一」のものだつたら——たとえば大文字の「人間」という一者しかいなかつたとしたら——そもそも「わかり合う」必要ははじめからないだろう。話し合う必要はないし、行いによつて何かを伝える必要もない。そこには実はすでに一つのもの、単数かつ同一の「われ」しかいないのだ。：〔Ⅲ〕

この単数の「われ」の同一性の中には、当然のことながら「間」がない。だとすれば「われ」が別の「われ」に向かつて——自分とは違う他の「われ」に向かつて——自分を伝える余地¹¹距離はそもそも存在しない。そして、もともと差異も距離もない同一者しかいないとしたら、そこには、わかつてもらわなければならない異他的なもの——「X」はいない。

だが、実際には、われわれはいつも、互いに話し合つてゐる。誰かに対して何かを行つてゐる。そうして自分を伝えている。

この事実自体が、まさに「人間の複数性という事実」の証拠だ、と、アーレントは言うのである。われわれが現に話し合つてゐる、何かを伝え合つてゐる、ということの事実こそ、われわれが等しいものであり、同時に異なるものである、ということの証である、と。……〔Ⅳ〕

だからこそ、われわれは話すのだ。

つまり、われわれが、互いの（差異を含みうる）考え方を理解し合おうとして（理解できるだらうと信じて）向き合い、話し合い、互いの眼前でパフォーマンスしあつてゐる、という、誰もが現に今そこかしこで行つてゐる事実。こそが、われわれが「われわれ」である、という共通性と共に、だが「われ」と「われ」が同一ではなく差異を持つもの——「われ—われ」——であるという、「間」を持つわれわれの特殊な複数性を証明しているのである。……〔V〕

このことは、実はわれわれのあり方にとって決定的である。

「有機的生命の場合には、同じ種に属する個体の間においてさえ、すでに多様さと差異が含まれてゐる。しかし、この差異を表明し、他と自分を区別することができるのは人間だけである。そして、人間だけが、何かあるものを——例えば渴き、飢え、愛情、歓喜、恐怖などのようなものを——伝えることができるだけでなく、自分自身をも伝えることができる。このように、人間は、他性（otherness）をもつてゐるという点で、存在する一切のものと共通しており、差異性をもつてゐるという点で、生あるものすべてと共通してゐるが、この他性と差異性は、人間ににおいては、唯一性となる。したがつて、人間の複数性とは、唯一存在の逆説的な複数性である。」

「話すこと」と「行動」（action）が、この唯一的な差異を明らかにする。そして、人々は、「話すこと」と「行動」を通じて、ただ単に違つてゐるだけではなく、互いの区別を認め合うのである。つまり「話すこと」と「行動」は、実に、人間が、物理的な対象としてではなく、人々として、互いに現われる様式なのである。

結局のところ、人間の唯一的な差異を明らかにするのは、彼の「話すこと」と「speech」と「行動」（action）なのだ。そもそも「私たちがくだす定義はすべて差異のことにほかならず、他の物と区別しなければそれが何であるかということを言うことはできない」としても、外から観察される違いがその人を存在させるわけではない。それが違いを構成するわけではない。人間の場合には、見た目の「客観的な」あれこれの違いが「人間の複数性」を作るのでない。人間は、ただ「そこにいる」だけでは存在することができないのだ。ただ「そこにいる」だけでは、その人の差異は明らかにならず、他の人と区別されることができないのである。

自らを伝えて初めて、人は他者の眼前に現れることができる。

そうアーレントは言う。そしてそれがわれわれの特殊な複数性を構成するのである、と。話すことと行いを通して、人は自らを語る。話すことと行いを通して人は自分の違いを表す。そのことによつて初めて、彼はわれわれの眼前に現れる⁴存在することができる。「行いをしたり話したりすること」の中で、人々は自分が誰であるかを示し、唯一の自分のパーソナルなアイデンティティを積極的に明らかにし、こうして人間の世界にその姿を現す」のである。逆に言えば、話すことと行いを通して自らを表現しない限り、人間は存在することができないのだ。

それがアーレントの考える人間の条件であり、人間の本来性なのである。

だが、そもそも「人間」について、あるいは人間の本来性について語ることは可能なのか？

アーレントの言い方を借りれば、普遍的な「人間」は存在しないのではなかつたか？「人間が存在する」のではなく、「固有性を持つ唯一のその人たち」として構成される「人々」しか現実には存在しないのではなかつか？それなのに「人間」について語ることが可能なのか？

いや、むしろそれがアーレントにおいて「人間」というものの唯一可能なあり方なのである。つまり、「人間」という抽象は、具体的な個の複数性において存在するのだ。差異ある個々人の複数性が確保される空間が「人間」の空間なのだ。「人間」が存在するためには、人々が——その人の持つ差異、その人によつて表明される、その人唯一の差異によつて構成される、差異を持つ複数の彼一達の存在が——前提されなければならないのだ。

(五十嵐沙千子『この明るい場所』による)

問一 傍線部1 「單一的「人間」の規範性がわれわれの本来のあり方を疎外する」とあるが、どういうことか。

その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 「人間」という概念を主語にして考える思考は、「人間」と他の生物とを区別する上では有効であるものの、「人間」一般にあてはまる性質を詳しく検討するには不十分である、ということ。

ロ 「人間」という概念を主語にして考える発想は、一つの「人間」という理念を強調するあまり、国家や民族などの集団の中でしか生きられない個人のあり方を捉えられない、ということ。

ハ 「人間」という概念を主語にして考える発想は、「人間」をそれ以上分割できない基本的な単位と考えてしまふため、個人の中にある複数の側面を議論することが難しくなる、ということ。

ニ 「人間」という概念を主語にして考える発想は、「人間」という抽象的な理念を議論の前提に持ち込んでしまふので、現実に存在する個人の多様性が見えなくなってしまう、ということ。

ホ 「人間」という概念を主語にして考える思考は、特定の「人間」観のみを取り上げることで、時代や文化によつて異なる「人間」という理念の複数性を抑圧してしまう、ということ。

問二 傍線部2 「この多數性のうちにわれわれの複数性が常に現実化されているとは言えない」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものを次のの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 群衆の中で人間は、その集団と一体化することで、他の人々に影響を受けやすい存在になってしまふ。このように、多くの人々が集まることで人間の個別性や多様性が失われてしまう、ということ。

ロ 机の上の消しゴムの消しかすをつぶさに観察すると、一つ一つの形状が異なっていることが見えてくる。このように、多數であることと複数であることは決して矛盾するものではない、ということ。

ハ 群衆という概念は、集まつた人々の多様性よりも同一性や均質性に注目する立場で用いられる。このよう、多數であることと複数であることは、必ずしも一致するわけではない、ということ。

ニ 机の上の消しゴムの消しかすをいくら集めても、結局のところ消しゴムの残骸にしかならない。このよう、取るに足らないものが集まつても、個性を持った複数の集合とは言えない、ということ。

ホ 群衆が大きな力を發揮するのは、人々が同じテーマについて明確な意志を持つて集まるときである。このように、多くの人々があえて自分の個性を主張しない場面もある、ということ。

問三 文中からは左の段落が脱落している。この段落が入る箇所として最も適切なものを次のの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

われわれは、われわれを「われわれ」として認識している。だから「話せばわかる」はずである。しかし同時に、われわれは、同一のものではなく互いに差異を持つものであると認識している。だから「話さなければわからない」。

イ I ロ II ハ III ニ IV ホ V

問四 空欄 X に入る語句として最も適切なものを次のの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 人間 ロ 他者 ハ 群衆 ニ 個人 ホ 自己

問五 空欄 Y に入る語句として最も適切なものを次のの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 特權的 ロ 帰納的 ハ 絶対的 ニ 経験的 ホ 形式的

問六 傍線部3 「人間の複数性とは、唯一存在の逆説的な複数性である」とあるが、ここには、アーレントの考
える「人間」のどのような特質が表現されているか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、
解答欄にマークせよ。

イ 人間は、ひとりひとりが自分自身の存在を誰かに訴えかける能力を持つてゐるという意味で、本質的に
対等な存在の集合である、ということ。

ロ 人間は、生物としては同じ種に属しているものの、生まれつき異なる身体を持つてゐる以上、一人一人
を固有の存在と見なすことができる、ということ。

ハ 人間は、おのずと集団を作り上げてしまふ存在なので、相互に自分を伝え合うためにはいつたん他人と
の間に距離を設ける必要がある、ということ。

ニ 人間は、日常的なコミュニケーションの中で意見の対立を確認しあうことでしか、それぞれの差異を認
識することができない、ということ。

ホ 人間は、他の生物とは異なり、種としての同一性と個としての多様性の二つの側面を兼ねそなえる矛盾
をはらんだ存在である、ということ。

問七 傍線部4 「話すことと行いを通して人は自分の違いを表す」とあるが、具体的にはどういうことか。その
説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ われわれは、自分が何者かというアイデンティティを相手や場面に応じて作りかえている、ということ。

ロ われわれは、集団の中で意見をまとめていく作業を通じて自分の存在する意義を確認している、とい
うこと。

ハ われわれは、コミュニケーションを通じて自分を表現しあうことで互いを「人間」と認め合つてゐる、
ということ。

ニ われわれは、言葉で世界とかかわることを通じて「人間」としての集合的な価値観を作り上げてゐる、
ということ。

ホ われわれは、立場の異なる相手と意見をやりとりする中で「人間」として成長していく、ということ。

問八 次の中から本文の趣旨として最も適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ アーレントは、「人間」一般にあてはまる特質を具体的に考える作業を通じて、新しい「政治」のあり
方を見出そうとする思索を行つていた。

ロ 「人間」は、他の生物とは異なり過去や未来を想像する力を持つてゐるので、最終的な意見の一一致を目
指した「政治」の場を切り開くことができる。

ハ アーレントにとって、人々が異なる「政治」的な立場によつて分断されているという認識が、「人間」
の複数性を考える重要な契機となつていた。

ニ 自らの関心や利益の追求のみを優先し、世界のあり方に對して発言する意志を持たない人々は、そもそも
「政治」に参加する資格を持っていない。

ホ 人々が互いの差異を認め合い、異なる意見をためらいなく発言できる場を作り上げていくことが、アーレントの考える「政治」の条件となつてゐる。

(二) 次の文章を読んで、あととの問い合わせに答えよ。

「文字は空気だ」というスローガンは、「空気=どこにでもある、人間の生存に不可欠なもの」というガン意の比喩である。文字=空気に、非常にたかい価値が付与されているのがその特徴である。「たしかにそうだ」と、一瞬うなずいてしまいそうになることばであるが、そこにはおおきな矛盾がある。識字運動全体がかかえこんでいる、根本的な矛盾である。^a

現在の社会は、成員が文字の読み書き能力をもつことを前提につくられ、運営されている。その結果、識字は人間の生存（社会生活）に不可欠なものとして、まさに空気と同等の価値をもつにいたっている。文字がもつ「空気と同等の価値」は、文字それ自体に由来するものではない（人類は無文字社会を普遍的に経験しているが、人類史に無空気社会はありえない）。つまり、文字にたかい価値があり、その結果、非識字者に対する差別がうみだされているのは、「社会がそのようにしている」からである。文字の価値と非識字者差別は社会がつくりだしたものである。

「文字は空気だ」というレトリックは、レトリック特有の「ずらし」をふくんでいる。そのため、文字には人間の体にとつての空気同様、それ自体に内在する「本質的な」価値があるかのような錯覚をうみだすのである。レトリックは、そのおもしろさ・表現としての効果をうむ「意味のずらし」が意識されなくなり、ひとりあるきするとき、別の効果をうみだす。¹意図的な「ずらし」と現実の混同である。文字の読み書きができなければ、それだけで呼吸困難にもひとしいくるしみを甘受しなければならない状態においこまれる。しかし、それは「文字をしらないこと」²が原因なのではなく、そのような社会をつくっている多数者（識字者）の作為が原因である。「文字は空気だ」というスローガンがそのままうけとられることによって、非識字者差別の根本原因からは自動的に目がそむけられ、「空気とおなじだから、それをえるのは権利である」との主張がなされるにとどまつてしまふのである。

非識字者が識字者になつていけば、非識字者差別はへる。しかし、非識字者差別をうみだす社会はなにもかわらない。そのまま放置される。とりのこされた非識字者、あらたに社会へ参入した非識字者は、ひきつづき差別にさらされつづけるのである。つまり、「文字は空気だ」「文字をとりもどす」というかんがえかたは、非識字者差別の原因である「社会のありよう」「文字の価値が社会によつてつくられていること」をみすごしており、差別構造を再生産・強化してしまっているのである。

同様の問題は、識字運動関係者にみられる、文字・文章への過剰な意味づけにもみいだされる。

「文章は、人間の心を運ぶ車」といいます。綴る活動の魅力を示す言葉でしょう」

「文章は人びとのものの見かた・考え方をかたちづくる力をもつてゐる」

「文字を学ぶということは、自分の想いを綴るということです。言葉では話せない想いを他人に伝えたり、今の自分の心境を綴つたり、過去の自分と出会うことができるのも、文字が読み書きできるおかげではないでしょうか」

文字に「人びとのものの見かた・考え方をかたちづくる力」や「過去の自分と出会わせてくれる」はたらきがあり、「文章が人間の心を運ぶ車」なのは本当かもしれない。A、「人びとのものの見かた・考え方を

かたちづくる力」や「人間の心を運ぶ車」としての機能は、ほかの表現手段はないのだろうか。

B

つたとしても、そのなかで文字・文章がもつとも重要ですぐれたものだ、といえるのだろうか。さらにいえば、非識字者、無文字社会のひとびとは、「ものの見かた・考え方」がかたちづくられておらず、「人間として感性」がないのだろうか。

C

、これらの問いはすべて反語である。文字・文章について、その「力」「魅力」を特別に強調しなければならない理由はない。そこで意図されているのは、文字・文章への過剰な意味づけをしようとしているだけである。文字を「人間の感性」にまで直結できる合理的な根拠はありえず、それはただ文字に普遍的価値をあたえようとするイデオロギー^bにすぎないのである。このイデオロギーは識字者の権力を正当化し、識字者・非識字者間の非対称な関係を維持するための道具だてである。「文字」や「かくこと」を特別視し、特権化するこの思考は、識字者社会の内部でもたびたび言語化されている。

くりかえすなら、非識字者差別の基礎となっているのは、「識字を前提とする社会」や「識字に価値がおかれるうこと」である。こうした差別の社会的基礎を、差別に対峙するはずの識字運動内の言説がそろって肯定し、非識字者差別をみずから強化するという矛盾が生じているのである。ここには、識字運動のなかで主導的役割をはたし、言説をつむいでいるひとびと（識字者）⁵が識字運動に同化主義をもちこんでいるという構図をみいだすことができる。ありていにいえば、「文字は空気のように必要なものです。おまけに、文字にはすばらしくたかい価値があります。だからみんな識字者にならなければならない・なるべきなのです」ということである。つまり、識字運動の中心にいる識字者は、圧倒的なマイノリティである非識字者を、多数者（識字者）の権力をうんでいるイデオロギーに順応させようとしている。

少数者が多数者に「所属がえ」し、差別を解消しようとするのは非常に困難であるし、そうした運動のありかた自体が差別を固定化・再生産していくというのは、差別研究のもたらした知見でもある。⁶劣勢言語使用者がいくら優勢言語を学習しても、母語話者に「所属がえ」することは、原理的に不可能である。いわゆる「女」がいくら「男」なみをめざしても、まず「男」にはなれないし、性差別は原理的に解消しない。老齢期にはいつてから必死の学習によって文字をおぼえ、「識字者」になつたとしても、多数派である識字者と同等のよみかき能力の獲得は、ほとんど不可能なのが現実である。同化主義的主張はそれ自体、差別的なのである。「同化を達成しても、秩序に順応して適切に振る舞つても、社会は私たちを排除し続けていく」ということがおこる。問題とすべきなのは、いかに所属・属性をかえるかではない。真の問題は、所属・属性を「発見」し、つくりあげ、それを「もとからあつたもの」のようにみせて本質化し、差別をおこなう多数者や社会のありかたにある。

非識字者に対する差別が社会のありように起因していること、非識字者に対する識字化の奨励、文字の称ヨウ^cは同化主義・差別行為であるほかないことを確認した。しかし、これは二義的なものである。非識字者差別の母体となつてているのは、文字使用を自明視する社会、その社会を日々維持しつづけている識字者の日常的行為である。病院で看板をみて必要な窓口をみつけ、役所でもとめられる書類をかき、保育園の連絡帳で保育者とやりとりをする。こうした識字者にとっては日常の行為のつみかさねが、よみかき能力を生活の前提とする社会をさせ、同時に非識字者を排除・差別しつづける社会の維持を可能にしているのである。ここには、差別に「加担」している意識などないひとびとによつて少数者が排除されるという構造がある。

（かどやひでのり『識字の社会言語学』による）

問九 傍線部a・b・cのカタカナを漢字で表現したとき、同じ漢字をカタカナの部分に用いるものを、次の中からそれぞれ一つ選び、解答欄にマークせよ。

a ガン意

イ 弾ガン

ロ 溶ガン

ハ 祈ガン

ニ ガン蓄

ホ ト装

b ト露

イ ト航

ロ ト息

ハ ト勞

ニ 遷ト

ホ ト装

c 称ヨウ

イ ヨウ解

ロ 面ヨウ

ハ ヨウ綱

ニ 揭ヨウ

ホ ヨウ少

問十 傍線部1「意図的な「ずらし」と現実の混同」とあるが、それが起こるのはなぜか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 比喩するものとされるものに本質的にある違いが、次第に社会的な問題を引き起こすようになるため。
- ロ 比喩するものとされるものが、もともと同じものと見なされやすい特徴をもつてているため。
- ハ 比喩するものとされるものとは、完全に一致するものではないという意識が薄れてしまうため。
- ニ 比喩するものとされるものとの間にある違いが、明確に指摘できないほど微妙なものであるため。
- ホ 比喩するものとされるものが、しだいに互いの性質を似通わせていくようになるため。

問十一 傍線部2「多数者（識字者）の作為」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 社会の中で識字者が多くを占めているため、非識字者が苦しい思いをしばしば経験してしまうということ。

ロ 識字者が社会の中では大多数ではあるが、多くの人々はそれを積極的に認めようとしないということ。

ハ 多数者となっている識字者は、少数者である非識字者の側の価値を、必ずしも無視してはいないということ。

ニ 社会で多数者となっている識字の人々が、文字を使う能力を積極的に価値づけているということ。

ホ 識字者が社会で多数者となるため、少数者の側の権利がしばしば見過ごされてしまうようになるとということ。

問十二 傍線部3 「過剰な意味づけ」とあるが、その後に引かれている事例はなぜそう言えるのか。その説明として最も適切なものを次のの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ これらの事例では、私たちの感受性や考え方を形作るうえで、文字がまるで必要不可欠であるかのように表現しているため。

ロ これらの事例では、本来は表面に出てこない表現者の心理や内面についてまで踏み込んで表現しているため。

ハ これらの事例では、文字を使うという能力が本来もつてている価値を、必要以上に強めた形で表現しているため。

ニ これらの事例では、文字を使うことができない人々をあらかじめ除外したうえで、文字の価値を表現しているため。

ホ これらの事例では、文字を使うことによって生まれる価値を、文字そのものがもつてているかのように表現しているため。

問十三 空欄 A・B・C に入るのに最も適切な語句の組合せを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | | | | |
|-----|------|---|------|---|-------|
| イ A | とすれば | B | だが | C | しかし |
| ロ A | とはいえ | B | しかし | C | したがって |
| ハ A | しかし | B | あるいは | C | もちろん |
| ニ A | あるいは | B | とはいえ | C | つまり |
| ホ A | だが | B | とすれば | C | しかし |

問十四 傍線部4 「非対称な関係を維持する」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 社会で多数を占める識字者が、文字を使えない少数者の側の苦しみを、当然のものととらえているため。社会における少数者の側の人々が、差別されているという意識をそれほど強く感じてはいないため。

ロ 社会における多数者の側の人々にとって、少数者の側である非識字者の権利や意見が分かりにくいため。社会において非識字者は少数で、その意見が弱く、多数を占める識字者にまでその声がとどかないため。

ハ 社会の多数者の側の人々が、少数の非識字者のために自らの権利や便利さに制限を受けてしまうため。

問十五 傍線部5 「識字運動に同化主義をもちこんでいる」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 多数者の側と少数者の側の両方が、文字や文章を高く評価する価値観を共有することをよしとする考え方をすること。

ロ 読み書きができた方がよいという多数の側の価値観にあわせて、非識字者を変えていくことが当然であるという考え方をすること。

ハ 文字や文章に高い価値があるという考え方が、多数の人によつて共有されているがゆえに、その価値が正当であるという考え方をすること。

二 文字の読み書きが価値ある能力であるとする見方が自明ではないということを、広く共有していくような考え方をすること。

ホ 文字や文章を書く能力は多くの人にとつて有用なため、非識字者はしだいに減り、やがてすべて識字者となるという考え方をすること。

問十六 傍線部6 「差別を固定化・再生産していく」とあるが、それはなぜか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 識字者は、非識字者に対する否定的な評価を、多数者の側に立つて正当化してしまう傾向があるため。

ロ 識字者は社会の多数を占めており、互いの結びつきによつて少数の識字者よりも優位な立場をとることができるのであるため。

ハ 識字者は、社会の中で多数を占めており、自分たちのもつ価値観が疑わしいということを意識できないため。

二 識字者にとって有利な規準が温存されて、少数者の非識字者側が最初から不利な条件下におかれてしまうため。

ホ 識字者は社会の多数を占めており、かつ多くの場合、社会の生産性を高めていこうという意識を強く持つているため。

問十七 傍線部7 「二義的なものである」とあるが、その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 多くの人々が、意識せずに識字者を当然とする行為や考え方を身につけていることがより重要な問題である。

ロ 識字運動をする人々が、意識しないうちに識字を当然とする価値観を広げてしまうことがより重要な問題である。

ハ 識字者が、少数者である非識字者のもつている考え方や価値観を否定してしまうことがより重要な問題である。

二 識字運動が、日常的な営みの中で意識しないうちに非識字者を排除、差別してしまうことがより重要な問題である。

ホ 多くの人々が、文字を使うことを通して非識字者を意図的に排除、差別することがより重要な問題である。

(三) 次の甲・乙を読んで、あとの問いに答えよ。

【甲】次の文章は、鎌倉時代に成立した『沙石集』に収められた一説話である。これを読んで、あとの問いに答えよ。

中比、甲斐国に嚴融房といふ学生ありけり。修行者多く給仕奉事仕て、学問しけり。あまりに腹のあしき上人にて、修行者ども、時^{とき}、非時^{ひじ}、さばかり荷用するに、湯の熱きも、又ぬるきも叱り、遅きをも腹立て、とく持て来れば、「法師に物食はせじとするか」とて、食ひさしてうち置きて叱りけり。そのあはひを見むとて、障子のひまより覗けば、「あれは何を見るぞ」とて、いよいよ腹立しければ、常には心よからずのみありけれども、よき学生なりければ、忍びてこそ学問しけれ。

妹の女房、最愛の一子に遅れて、人の親の習ひといひながら、あながちに嘆きければ、よその人も訪ひ哀れみけるに、この上人訪はざりける事を、「あら I や。これほどの歎きを上人の訪はれぬよ。よその人だにも情けをかくるに」といひければ、弟子の中に聞きて、「かの女房の恨み申され候ふなるに、御訪ひ候へ」といへば、例の腹立して、「無下の女房かな。法師が妹などいはん者は、普通の在家人に似るべからず。生老病死の国にをりながら、II の愁ひなかるべしと思ひけるか。あら不覚や。いひかひなき女房かな。いでいで行きて、つめふせて来む」とて、かさかさとして行きぬ。「實にや、わ女房の歎きを訪はぬと恨み給ふなるは」といへば、「あまりの歎きに、心もあられぬままに、さる事も申してもや候ひけん」といへば、「無下の人かな。さすがこの法師が親しきしるしには、世の常の人にや似給ふべき。生ある者必ず滅す。会者は定めて離るる、南浮は本よりIII の國なり。前後の相違、母子の別れ、世になき事か。始めて歎き驚くべきにあらず。かへすがへすいひかひなし」と、叱りければ、「形のごとく、その道理は承りて侍れども、身をわけて出で來、なつけて候ひつる上、心ざまもかひかひしく候ひつれば、何の道理も忘れて、ただ別れのみ悲しく覚え候ふ」とて、涙もかきあへず歎きければ、「あら愚痴や。道理を知りながら、なほ歎くべきか。されば、それは知りたるかひか不覚や」とて、いよいよ責めふせけり。

さて、かの女房、涙を押しのぎひて、「そもそも人の腹立ち候ふ事は、あしき事か、又苦しからぬ事か」といへば、「それは貧賤痴の三毒^{とんじんち}とて、宗との煩惱の一なり。³ 疑ひにや及ぶ。恐ろしき過なり」といふ時、「などさらば、それほど御心得^ハのあるに、御腹はあまりにあしきぞ」といふに、はたとつまりて、いひやりたる事はなくして、「よしさらばいかにも思ふさまに歎き給へ」とて、叱りて出でにけり。まことにつまりてぞ聞えける。

物の理を知ると、知るがごとく行ずるは、道異なり。されば過を知りて、過をあらため、理を弁へて、理をみだらざるは、実の賢人智者なるべし。多聞広学なれども、身の過をあらためず、心のひがみ直さずは、いたづらに他の宝を数ふるに似たり。されば七種の聖財の中に、智者と多聞とは別なり。学生の才覚あるも、いかでか知れるがごとく行ぜむ。行ぜむ智者といふは、広く物を知らざれども、道理を弁へて知れるがごとく、恐れV を心得て、心明らかに悟りあるをいふなり。如実の行は、多聞よりおこるとして、多聞は実智を生ずる因縁とはなるなり。

或る俗いはく、「智恵なく愚痴なる在俗の、不当不善なるは、さるべきことなり。多聞広学なる僧の中に、心得ぬ事どものホノ見聞え候ふは、何を習ひ知り給へる、かひこそなけれ」と申ししをば、この道理をもて、「VI とVII とは異なり。されば書にいはく、「知る事のかたきにはあらず。よくする事のかたきなり」といへり。「まず世間に弓箭を取る人、合戦の場に名をも惜しまず、命をも捨てず、逃げ隠れ、怖ぢふためくは、口惜しき恥とは知りて侍るか」といふに、「いかでか知らぬ者候ふべき」と答ふ。「さて、この事知れる人は、人ごとに心も剛なるや」といふに、「さる人は希なり」といふ時、「されば世間の事は無始より慣れ来て、名利をも思ひ、恥辱弁へて、かけくみ打ち合ひ、身を忘れ命を捨てむ事は、多生に慣れ来たる事にて、よにやすかるべき道に、な

ほ心たけきは希に、不覚なるは多し、まして仏法はその道高く、その理かすかなり。学びがたく、まどひやすし。知る事なほたやすからず、行する事いよいよかたし。無始より今に知らずして、今日はじめてあへり。希にも信じ行するこそありがたけれ。仏の心を知つて、仏の行を学ぶ、いかでかたやすからむ。我が身にやすき世間の事を、知るままになす事のかたきをもて、仏法の習ひがたく、行じがたき事を推して、学者をそしるべからず」と申ししかば、道理にをれ侍りき。かの上人、この道理を弁へずして、なかなか在家の人につまりけり。妹ははは劣り、VIIIは勝りて、返てつめてけるにこそ。

(注) 時・非時：正午以前の食事と正午以後の本来食事をしてはならない時の食事。

南浮なんえん：南闇浮堤の略。仏教で須弥山の南方海上にあると考えられた大陸。人間の住む世界。

問十八 傍線部1「常に心よからずのみありけれども、よき学生なりければ、忍びてこそ学問しけれ」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 修行者たちはいつも不愉快だったが、心根の良い学生たちだったので、真剣に学問を学んでいた。
ロ 修行者たちはいつも不愉快だったが、嚴融坊が心根は良い学僧だったので、静かに学問を学んでいた。
ハ 嚴融坊はいつも不愉快だったが、優れた学僧だったので、修行者たちはがまんして学問を学んでいた。
ニ 嚴融坊はいつも不愉快だったが、心根は良い学僧だったので、修行者たちは内密に学問を学んでいた。
ホ 嚴融坊はいつも不愉快だったが、優れた学僧だったので、嚴融坊はその気持ちを抑えて学問を学んでいた。

問十九 空欄Iに入る語として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ うたて ロ あはれ ハ いとし ニ かしこ ホ むざん

問二十 波線イヽホのうち、一つだけ文法的な用法が異なるものがある。それはどれか。最も適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

問二十一 空欄II・IIIに入る語として最も適切なものを、次の中からそれぞれ一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

- | | | | | | |
|--|--------|--------|--------|--------|--------|
| 空欄 II | イ 惡憎会苦 | ロ 求不得苦 | ハ 輪廻転生 | ニ 愛別離苦 | ホ 一期一会 |
| 空欄 III | イ 無常迅速 | ロ 老少不定 | ハ 四苦八苦 | ニ 忽親平等 | ホ 盛者必衰 |

問二十二 傍線部2「離るる」・傍線部4「怖ぢ」の活用型はそれぞれ何か。最も適切なものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

イ 四段活用 ロ 上一段活用 ハ 上二段活用 ニ 下一段活用 ホ 下二段活用

問二十三 傍線部3「疑ひにや及ぶ」の解釈として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 疑うに越したことはない。

ロ 疑いを持つにいたる。

ハ 疑つてみたい。

ニ 疑いの余地はない。

ホ 疑つてみるべきだ。

問二十四 空欄 IV · V に入る語として最も適切なものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

イ 行 口 理 ハ 宝 ニ 知 ホ 過 ヘ 身

問二十五 空欄 VI · VII に入る語として最も適切なものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

イ 実 口 善 ハ 知 ニ 俗 ホ 僧 ヘ 行

問二十六 空欄 VIII · IX に入る語として最も適切なものを次の中から一つずつ選び、解答欄にマークせよ。

イ 智惠 口 愚痴 ハ 不覺 ニ 名利 ホ 多聞 ヘ 耻辱

問二十七 本文の内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 弓矢をとる武士は合戦に出て、いつでも死ぬ覚悟ができているから、実践であたふたすることはない。これはすぐれた法師と共に通する心の持ちようである。

ロ 道理をわきまえて道理を教えられる人を賢者という。そのような賢者となるのが仏教の最終的な目標であり、厳融坊はその境地には達していなかった。

ハ 厳融坊は眞の仏教の修行者でなかつたために、人の情愛を理解できなかつた。妹に子供との死別を受け入れるように迫つたのは、仏教の教えとは異なつてゐる。

ニ 仏教はその教義を日常的に実践することの方が困難である。従つて、教義をたくさん学んだほうが仏教を究める上では近道といえる。

ホ 知識があつても実行が伴わないことは、仏教だけの問題ではない。しかし、深遠な教義を持つ仏教では、特にそのような弊害に陥りがちである。

問二十八 次の中で、鎌倉時代の成立ではない説話集はどれか。一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 宇治拾遺物語 ロ 古事談 ハ 日本書紀 ニ 古今著聞集 ホ 十訓抄

【乙】次に示すのは『史記』卷四「周本紀」において、蘇厲が周君に強大化する秦の侵攻をかわす方策を進言したことばである。その発言中に現れる「養田基」は、問題文【甲】の一重傍線部にいう「弓箭を取る人」として、中国史に名高い人物である。これを読んで、あととの問い合わせに答えよ。なお、設問の都合上、返り点・送り仮名を省略した箇所がある。

秦破_リ韓_ヲ・魏_ヲ・扑_リ師_ヲ武_ヲ北_{ノカタ}取_{リシ}趙_ヲ・蘭_ヲ・離_リ石_ヲ者_は皆白起_也。是善_ク用_レ兵_ヲ又有_リ天命_ヲ今又將_レ兵_ヲ出_レ塞_ヲ攻_ム梁_ヲ梁_ヲ破_{レバ}則_チ周危_{カラ}矣。君何不令人說白起乎。曰、「楚有_リ養由基_{トイフ}者_。」善_ク射_ル者_ヲ也。去_{ルコト}柳葉_ヲ百步_{ニシテ}而射_レ之_ヲ百發_{シテ}而百中_レ之_ヲ。左右觀_ル者數千人皆曰、「善_ク射_ルト」有_{リテ}一夫立_チ其_ノ旁_ニ曰、「善_シ可_レ教_レ射_矣。養由基怒_リ积_ス弓_ヲ塗_{リテ}劍_ヲ曰、「客安能教我射乎。」客曰、「非_{ガル}吾能教_二子_ニ支_レ左_ヲ右_ヲ也。夫去_{ルコト}柳葉_ヲ百步_{ニシテ}而射_レ之_ヲ百發_{シテ}而百中_レ之_ヲ。不以善息_{シテ}少焉氣衰_ヘ力倦_ミ弓撥_{ソリ}矢鉤_{カガマリシテ}一發不中_者百發尽_息。今破_リ韓_ヲ・魏_ヲ・扑_リ師_ヲ武_ヲ北_{ノカタ}取_{リシ}趙_ヲ・蘭_ヲ・離_リ石_ヲ者_は公_E之功多_シ矣。今又將_レ兵_ヲ出_レ塞_ヲ過_ギ兩周_ヲ倍_レ韓_ヲ攻_ム梁_ヲ一舉_{シテ}不得_ス前功_ノ盡_ク棄_{テラレン}公_F不如_シ稱_。病而無出_。

(注)蘇厲：遊説家蘇秦の弟。周君：周の君。

秦・韓・魏・趙・梁・周：国名。

師武：魏の將軍。蘭・離石：地名。

白起：秦の將軍。兩周：東周と西周。

問二十九 傍線部A 「君何不令人說白起乎」とあるが、蘇厲がこう提言したのはどのような戦況分析に基づくものか。最も適切なものを次のなかから一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 天命をかしこむ秦王が自ら梁の要塞を擊てば梁は敗北して、危険が周に迫る。
ロ 蘇厲とともに白起が自ら戦陣に立つて梁を打ち破つても、周は危険に曝される。
ハ 敵将である白起が軍を率いて梁に攻撃をかけ梁が敗れたならば、周が危うくなる。
ニ 秦の將兵が要塞を出て戦う梁を攻撃して梁が破られたならば、周の國が危険になる。
ホ 蘇厲が周の軍を率いて梁に出撃し梁を破り得たにしても、周の國の危険は避けがたい。

問三十 傍線部B「客安能教我射乎」には、養由基のいかなる思いがうかがえるか。最も適切なものを次のなか
ら一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 百発百中の技量を全く認められず、嘲笑された不快感。

ロ 百発百中の技量ながら、それを理解されないもどかしさ。

ハ 百発百中の技量を披露した上で、指導を拒まれた不愉快さ。

ニ 百発百中の技量を認められながら、射撃の欠点を直された不満。

ホ 百発百中の技量にもかかわらず、射撃を教えるといわれての憤懣。まん。

問三十一 傍線部C「不以善息」は「善いところで息めておかなければ」という意味である。この意味に沿った
返り点として最も適切なものを次のなかから一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 不_二以善息

ロ 不_レ以_一善_一息

ハ 不_二以_一善息

ニ 不_レ以_一善_一息

ホ 不_二以_一善_一息

問三十二 傍線部D「一発不中者、百発尽息」はどのような意味か。最も適切なものを次のなかから一つ選び、解
答欄にマークせよ。

イ 一発射はずしたならば、百発射る意味はない。

ロ 一発でも射はずせば、百発百中の評価は潰_{つぶ}える。

ハ 一発射はずすだけで、百発打つ氣力はそがれる。

ニ 一発射はずせば、百中するまで息を抜けなくなる。

ホ 一発でも射はずした者は、百発を射ることはできない。

問三十三 傍線部E「公」は誰を指すか。最も適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 蘇厲 ロ 周君 ハ 白起 ニ 養由基 ホ 師武

問三十四 傍線部F「不如称病而無出」はどのような内容を説いたものか。その解釈として最も適切なものを一
つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 出兵を請われても、病気を口実にして出陣しないのがよい。

ロ 戰功を褒められても、病気を口実にして出兵を断るのがよい。

ハ 引見を命ぜられても、病気を口実にして命令を退けるのがよい。

ニ 対面を求められても、病気を口実にして応対しないのがよい。

ホ 戰況を問われても、病気を口実にして分析を断るのがよい。